楽しく「ルーキーズ」野球

今春創部の品川翔英・石田監督

Motive 夏への原動力 4

試合前のノックをする品川翔英の石田寛監督＝大田区中馬込3丁目

九回表2死。守る品川翔英（品川区）は3点のリード。3番手の投手、高木英寿（2年）が最後の打者を三振に仕留めた。ゲームセット。「よしっ」。石田寛監督（34）は右手をぎゅっと握りしめた。

6月4日、大田桜台（大田区）のグラウンドであった大田桜台・葛西南・つばさ総合の合同チームとの練習試合で、今年4月に創部した品川翔英が2勝目をあげた。小野学園女子高が2020年に共学となり、野球部は翌年に同好会としてスタート。この春に部へ昇格した。部員集めから尽力してきたのが石田監督だ。

試合中はワンプレーごとに石田監督の明るい声が響く。三振しても「右方向の意識はオッケーだよ！」。試合後は「失敗も次に生かせばいいから」。とにかく意識するのは、楽しく野球をやること。「ポジティブな方向に変換します」

人気ドラマ「ROOKIES（ルーキーズ）」にあこがれ、教師になった石田監督。その熱意と明るさで、赴任する先々の高校で野球部を立て直してきた。

怒らない・脱丸刈り 部員伸び伸び

石田監督は都内の私立高校の控え捕手だった。「都大会で3～4回戦レベルのチーム」だったが、練習は厳しかった。それに耐えることが「格好良い」と思っていた。もちろん丸刈り。でも振り返ると、「ミスしないように」との思いが先行し、伸び伸びとプレーできなかった。

大学生になって始めた草野球が楽しかった。みんなで打順を考えて試合に臨んだり、凡打になっても明るく励まし合ったり。そんな頃に「ルーキーズ」を見て感動した。高校野球の監督を夢見たが、「自分の実力では無理だ」と断念した。

民間企業に就職したものの、あきらめきれなかった。「自分には自分の色がある」。こう決意して26歳で脱サラし、教員の道へ進んだ。目指す野球は「怒らない・楽しくやる・脱丸刈り」。

最初に着任したのは赤羽商（19年度で閉校）。野球部はあったが、部員ゼロの休止状態だった。校内全18クラスをかけ回って選手を集めて、翌年には夏の大会に出場した。18年に定時制の朝霞（埼玉県）へ。ここも部員ゼロ。部員集めから始めた野球部は翌年、定時制通信制の県大会で優勝した。

21年、品川翔英に採用された。まずは同好会から。1年生11人が集まった。硬式野球経験者は1人だけ。全くの初心者も2人いた。

校内には野球ができるグラウンドがない。ノックなどは25メートルプールほどの広さの駐車場で。投球練習用に、跳び箱の最上部とベニヤ板を組み合わせて「マウンド」を作った。

1年目は草野球チームと試合した。中学生チームにも15点ほど奪われ、こちらは1点も取れず惨敗だった。「中学生に負けるのは恥ずかしい」と選手たちは落ち込んだが、石田監督は「負けは成功者が必ず通る道」と鼓舞し続けた。少しずつフライやゴロも捕れるようになり、スクイズも決まるようになった。

こうして迎えた5月15日、葛西工との練習試合。延長戦を11－5で制し、初勝利を飾った。石田監督は「本当にうれしいけど、涙は公式戦の勝利まで取っておく」。そんな石田監督について、エース生田蓮（2年）は「自分たちと一緒の目線に立ってくれる人」と慕う。「ちょっと、おやじギャグが多いけど……」

初の公式戦は東東京大会。7月12日、神宮球場と決まった。試合前、「ルーキーズ」の主人公、川藤先生の言葉を選手たちに伝えるつもりだ。「夢にときめけ、明日にきらめけ！」

（本多由佳）

初の公式戦 挑めて幸せ

品川翔英の石田寛監督（34）

夢舞台に立つことをとにかく楽しんでほしい。初の公式戦はみんなが憧れた甲子園につながっている。そんな試合に挑めて幸せだと思う。本番までに、全力でみんなを褒めて、自信をつけさせて試合に送り出す。

手作りのマウンドで投球練習をする生田蓮＝品川区西大井1丁目